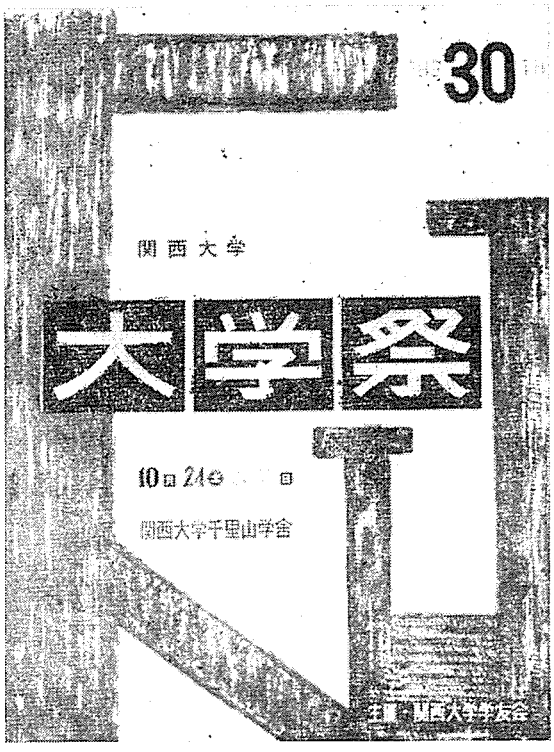
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, Oct. 30th, 1959, No. 332.

關西大學學報

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十四年十月三十日発行（毎月一回三十日発行）
通巻三三二号

昭和34年10月　第332号



大学祭ポスター

關西大學出版部

九州の民謡を訪ねて

関西大学邦楽部
樋口勝彦　法学部三年次
平田健　法学部三年次
白神康司　商学部二年次

我々三年来の宿望の出発日三月十二日、善意と好意に満ちた校友や先生の見送りを受け自転車にて九州一周の旅に立つた、古言によれば「鉄は熱い中に打て」と言う言葉があるが今の我々にとつてはまさに至言、然しながら全行程約二千粁、悪路、悪天候、故障等全ゆる悪条件が含まれることを考えればそう甘くみるのは危険であろう。

さて三月十三日、神戸より山陽路に入る、須磨、垂水、舞子と海岸線の美しさを左に新緑の兆ある山々を右に見て一路姫路に向う、我々三名肩から「大阪—鹿児島」のタスキをかけて旅行しているため思わぬ所から激励を受けて感激することがあつた、初日にして早くも自由労働者群より激励を受けた、六時前前方に夕焼に浮ぶ白鷺城にペダル一段と軽くなる、市内を巡る前に校友会に御挨拶に行く田中、滝両先輩の御厚意で早速宿を探して下さつた。旅に出て旅館に疲れをとる位気持のよいものはない、この宿もその例にもれなかつた。

十四日　道が悪かつた為かまだ自転車になれなかつた為か今日は予想以上に故障が発生した、即ちパンク三台、変速ギア二台と散々なる目に会つた、と言う訳で四時間位損をしたので岡山入が困難になつてきた、しかし予定を出発二日目にしてくるわす法はないと三名、夜行を強行する、岡山の道は全国的に悪いとされているがその中を時速二十五粁平均でつつぱしたのだからその強行ぶりが推測されると言うもの、十一時半岡山駅に着いた時もよくあれで事故が起らなかつたものだと感心したものであつた。

十五日　やはり昨日の強行は無理だつたと見えて自転車が完全に調子が狂つてしまつた、とにかく整調するのに昼までかかつた、昨日の強行は結局何にもならなかつた、「急がば廻れ」その通り、とにかく倉敷を経て福山に向う、これ又夜行になつてしまつた、福山は三名には未知の土地しかも時刻は午前二時、地理が分かろう訳がない、ところが目の前に大きな城跡があつた、福山城跡である、ここに決めたとばかり三十段位の石段を自転車をかついで登つた。テントを張るには絶好の場所である、時すでに三時、今でも頭に残るあの情緒、古城と松を照らす月の下で尺八を吹いている姿、あれで女の子にもてなかつたら不思議な位である。全く。

十六日　テントの外を通る人の足音に目をさます、通行人は妙な所にテントを張つたものだと言いたゆな様子で通り過ぎていつた、とにかく腹ごしらえをしようと近くの「メシ屋」に入り大盛白飯と素ウドンで朝食をすます。その店の娘さんに記念写真をうつしてもらう、大体このあたりの人々は大学生を良くしてくれる、ここの娘さんもその例にもれなかつた、高い授業料を払つているだけのことはあると内心授業料の価値について再認識（？）する、とにかくこのようにして福山を出発したが尾道を過ぎた頃より雨が降りだした、全くいやな感じ、ましてその街道は名おての難所である、しかし「限りなき前進と」勇んで登り始めたが雨いよいよ激しくレインコートを着ているとは言え、それは名だけ身体中「ズブヌレ」これじやファイトもへつたくれもあつたもんじやない、時は既に八時を指している、灯を見つけて宿らしきものはないかと聞くと昔商人宿をしていた宿があると言う。行つてみると宿は宿でも民家に毛の生えたもの、しかしぜいたくは言つておれない泊めてもらう、あの時は本当にホッとした感じであつた、ましてや風呂に入つた時の感じたるや何物にも変え難いものがあつた、フトンが目に入つた時には眠つていた。

十七日　朝日に気を良くして起る。昨日に変る今日の天気まさに絶好のサイクリング日和である。自然の偉大さを目の前にみせつけられた感じである、雨が上つても難所はやはり難所であつた。とにかく押して上るより手はない、しかし苦あれば楽ありの例の如く八本松と言う地点に達した時通行人の話によると広島まで下り坂だと言う。さて今までのうらみをこの坂でとゆつくり昼食をした後でブレーキを調整して一気に下

つた、最高時速五十二粁、平均時速三十粁とまさに快適の一語に尽きるダウンヒルであつた、三輪車等は後の方からバタバタと見苦しい音をたてて追つてきた、四時過ぎ広島に到着、すぐに原爆投下地点に行き被災者の安らかな成仏を祈る、それより親切な市民の案内で校友会支部長今西先輩の家に行く、この先輩は関大には一年しかおられなかつたそうであるが大変親切にして戴いた、又原爆爆発地点より九百米の所で難を受けられたが何分の一秒かの差で難をさけられたとか言つておられた、運命と言うもの程勝手なものはないとつくづく思つた。夜遅くまでその御家族の方と旅行の事について歓談し家庭的なフンイキで非常に楽しかつた。

十八日　八時五十分出発、今までで一番出発時刻が早かつた。道がよく朝の広島を快適にペダルをふむ。宮島を経て錦帯橋に到着、昼食をとる。錦帯橋はウワサ程美しくないが、その質素な木造作りの橋は如何に色彩を加えた橋より優るとも劣らないであろう。他の観光地にも見られる様に多くの観光客がきていた。特に大阪から来た人に話しかけられた時は懐しかつた。錦帯橋を渡らずさわつただけで徳山に向う、途中勝間と呼ぶ小村があり、そこでリンゴを一つづつ食べた所奥からおばさん出てきて言うには「御苦労さんです、これから徳山には大分あるから夕食をここでして行きなさいついでに風呂も沸いていますからよかつたらどうぞ」と田舎にしてこの言葉あり都会に於てこの言葉を探すには苦労することだろう。

　それはさておき、「それでは」と我々、その御好意を受ける、時六時その夕食は情を知るか特においしかつた。しかしさすがに風呂だけは辞退してその店を失礼した、出発の時には御菓子まで戴きその晩のオヤツには不足しなかつた、ところが物事は良い事の後には悪いことが来るらしく徳山について例の如く地理が分らない。警察へ行つてみたが満足にテントを張る所がない。長い間待たされたあげく児玉神社を紹介してもらつた。しかし行つて驚いた、夜の為かも知れないが、全ゆる種類の小説、映画に出てくる「ユウレイ屋敷」に匹敵する程の腐れかた、おそらく一人ではとても入る気にはなれなかつたであろう。しかしとにかく外に方法がない。懐中電灯をたよりに寝場所を探す、臭気漂よう中で寝たのが十二時過ぎ、さすがに静かなものである。

十九日　児玉神社、昨晩とは全然感じが違う、隣には学校があるらしく学生の声がする、何でも聞く所によればその社は児玉大将と言う人を祀つた所であるとか、地下ではその大将どう思つているだろうか。とにかく「オンボロ社」を飛び出して朝食を探しに出た、駅前食堂、そこの女主人気の良い人で食費をただにしてくれてミカンと言う土産まで戴いた、本当に徳山の人は親切だ、特に女の人であるが、椿峠を登り、下つた所が防府であつた、校友会も名所もなく素通りする。着いた所が長府。ここは今でも幕末の臭のする所である、高杉晋作、乃木大将の出生地でもあり、奇兵隊の発生地でもある。本州最後の夜と言う訳で初めて宿らしき旅館に泊る三人で金壱千円也。

二十日　今日で本州ともお別れである、旅館を出発して約二時間、一時十分関門トンネルの入口に到着、通行料、自転車、人間共に三十円也、海底道路は陸の上と違い完全に舗装されていた、あたりまえの事であるが、それ程陸上の道は悪かつた。さていよいよ目的地九州に到着した、エレベータを上つた所で新聞記者に話しかけられ、こちらも民謡を調べる為の予備知識を聞く、昼食は関門自動車道路入口の近くにある公園でとつた。のんびりした春の日であつた、三時頃からそこを出発して博多に向う、北九州工業地帯にしては道がお粗末、自動車道路と市電の間が自動車一台にて接触せんばかりである。そのせいか市電の警笛も上品なウェスミンスター風な音色である。本州でもやつていたように九州第一日目早速ナイトランである、十時半親切な人の案内で博多市内を説明してもらい目的地に案内して戴いた。樋口の友人宅にてその夜を過した、今日は良く走つた今までの最高である、即ち百三粁である。

二十一日　朝十時頃までゆつくり寝る、今日は一日休養である。そこの自動車を借りて太宰府まで見物に出かける。菅公の流された土地として有名でありその面影がわずかに残つていた。帰りに博多の町をみたが昔黒田候の城下町として栄えたこの地は黒田節の発生は当然と思われるのも成程と思われる質実剛健な所が所々に残つていた。又海外に雄飛し昔日の博多商人の味ある博多節、ひようきんな博多子守歌、ドンタクの歌など数々の民謡があるが伝統ある正調物を聞く機会を得られなかつたのは残念であつた。

二十二日　とにかく九州の人の親切さには驚かされた。僕達が学生である為かも知れないが本当に親切にしてもらつた。今日もほこりの舞う道を唐津に向う途中、坂道で小休止をしていると十米程離れた自転車屋のおじいさんわざわざ出てきていわく「油はどうかね」とうろたえている我々をしり目に三台の自転車に注油をすませ目的地までのコースを教えて戴き、礼を言うまもなく店に帰つてしまつた。かくの如く人情は厚いが景色の良いのも一つの特徴である特に海岸沿いの松原の美しさには驚かされた。「生ノ松原」「玄海

国立公園」カメラを手にすることまた少なからずやである。

景色をみている中に日が暮れ宿泊予定地である唐津のお寺に行く時間が遅れてしまつた、八時頃ついたがその寺の住職さん、いやな顔もせずに本堂に案内して戴き風呂、夕食と普通の家と同じような待遇をして下さつた。唐津は寺沢志摩守の居城があつた土地で豊臣秀吉が朝鮮征服を行つた時の木拠がここの近くの名護屋と言う所にあつたそうである、とにかく晴れた日には対島を経て朝鮮が見えるとか見えないとか、大陸に近いことは違いない。

二十三日　昨晩ねる時に七時に起して欲しいと頼んでおいた所、丁度七時に起され、ねむい最中にと自分らの頼んだことをウラミに思い寝ている訳にもゆかずごそごそ起きだした。庭で顔を洗つていると朝めし前に町の中を案内してやろうとひつぱり出され舞鶴公園に登る、しかしねむけと、くいけは公園よりみわたした景色が一度にふきとばしてくれた、おまけにすがすがしさと言う有難いものまで無料でくれた、住職さんの御蔭で普通なら見ることが困難な唐津焼のカマ元の中を見せて戴いた、ついでに畑違いとは思つたが民謡のことをおききした所、やはり余り御存知なかつた、唐津には古い民謡は知る機会がなかつたが明治・大正時代にはやつた「からつ節」これは唐津焼を作る職人達が土をこねながら歌つた民謡だそうだ、その他「唐津小唄」「松浦潟」等があるが比較的新しいものである。九時市役所で市長にお会いしたが別に何と言うこともなかつた。

此頃になると昼食は自転車に乗りながらたべると言う技を身につけた、案外便利なので三名利用しだした、終いには両手を離して水筒の水をのむ芸にまで進歩した。しかし菜花畑の黄色一色の中を自転車三台走つている姿は一つの絵になるだろう、走つている本人は汗をかいているが、快調に走つている中に少し方角が違つてやしないかと三人気がつき初める、時十二時、地図をみると案の定、正反対の小城と言う方に向つていることに気付く、曲り角をまちがえたらしい、おかげで四十粁程損をしたため予定の大村についたのは小雨降る九時前であつた、宿に泊まる余裕なくテント張る場所なく止むを得ず小学校に飛び込む。宿直の先生二名おられたが学校は校長の許可が必要であるから駄目との返事、三人顔を見合わせる、年輩の先生、気の毒に思つてか「私の家に泊りなさい」とのこと三人あつかましい話しだけれどもすぐにそれじやと言うことになり、その夜はその先生の家に御世話になつた明日の天候の回復を気にしながら床についた。

二十四日　朝起きて雨が激しく降つているのをみて出発の意欲そがれる、と言つてここに寝ている訳にもいかない。レインコートに身をつつんで出発する。長崎県は案外道がよいため雨の中を走つていても余り気疲れがしない。昼過になると雨が上り長崎市まであと数粁と言う所では完全に晴れ道の両端のシュロの木の青さが水を含んで美しい。さすがに南国の情緒ある姿である。長崎駅前にきた時は暑い位の天気に回復していた。あちこちの写真をとつて五時頃校友会支部長の篠原先輩を訪ねる、篠原さん快よく迎えて下さり、長崎新聞につとめておられることから、我々の旅行の事について記事をとられた。又明日他の校友会の人々にお会いすることを約して今晩の宿（唐津のお寺より紹介のあつた寺―泰三寺）に行く、丁度お寺では大法会が行われている最中であつたが快よくその晩の宿を供して下さつた、まさに「渡る世間に鬼はない」至言である。

二十五日　お寺で食事するの二度目であるが近頃のお寺は大分近代化が進んでいると見えて肉魚が目だつ、僕等の為の特別のものとしたら大変失礼であるが。篠原さんの御紹介で長崎国際文化会館内の図書館長にお会いして多くの民謡についてお聞きする、ここでは簡単に書くことにして詳しくは又の機会にしたいと思う。この地方には海外貿易を中心にして発展したため異つた民謡、即ち日豊線方面の陰気な民謡に対し陽の民謡とさえいわれる。

月琴と言う琵琶に似た楽器がこの地方に於て良く用いられそれに合わして歌われる民謡があつたが、現在では月琴を引きこなせる人は一人老人がいるらしいが、はつきりしないと言う話しであつた。民謡の名にしても面白いものが多く「アチャサン節」これは女の人が男の人をふる場合の歌である。又良く知られている春雨が長崎民謡であることは意外であつた。その夜、校友会より招待され、その名も懐かしい通天閣と言う支那料理に行く。久しぶりの豪勢な夕食である、これからの旅にそなえて食いだめをしておけと先輩方に言われたが、そう言われる前に三名、腹一杯になり動くのも大儀であつた、食後田中先輩の運転で（すこくうまい）長崎の夜景をみわたせる矢大楼に案内して戴いた、その夜景は評判にたがわず、すばらしいものであつた。いつまでいてもあきない程の美しさであつた。帰りは寺まで田口さんの車で送つてもらつた、車が町の方に帰つていく姿をみて先輩は良いものだと思わずにはおられなかつた、泰三寺にその晩も御世話になる。

二十六日　今までの最高否この旅行で最高の高さである雲仙に登ることになつた。道は有料道の為念入に道

が良かつた。しかしくねくね曲つている坂を登るのはつらかつた、身体は汗だらけになり、すぐ上に通つている道を二百米も三百米も遠回りして登るのはかついで登つた方が楽ではないかとさえ思われた。とにかく三名ファイトファイトと、向い坂に災されながらも最後まで自転車を降りなかつた。温泉場の湯煙を目にした時はさすがにホッとした。まして汗に汚れた身体を温泉にひたした時の感じはまさに値千金にも変えられない程のものであつた。

二十七日　やはり旅館である畳の上でしかも蒲団の中で目をさましても起きるのがおつくうになり、その中でうたたねを楽しんでいた。いつまでもそうしていたいのはやまやまなれどそうはゆかない。おかげで出発が十二時になつてしまつた、雲仙下りこれは前より快適なダウンヒルが出来ると楽しみにしていたのだが道の悪いことといくら無料道路だからと言ってこんな無茶なことはない少しでもスピードを出そうものならスリップして身体を放り出されてしまう、だからブレーキのかけつぱなし、お蔭で手がだるくなつてしまつた。途中の見はらし台があつたのを幸い、そこで休むことにした。そこに五六人の観光客が陣取つていたが我々のタスキをみて「あんたらも大阪でつか」と訪ねられた。突然の大阪弁にびつくりしたが、その人達も大阪の人であつた、色々と話したが結局はよくここまで自転車でと言う声が一番多かつた。別れ際には沢山の土産をもらつた。同郷人の有難さを知つた出合であつた。島原より汽船に乗り三角に向つた六時過三角着、すぐに夜道を宇土に向う。既に日は暮れ、走る左右の家々の灯に、煙突よりなびく、うすい煙にそぞろ家のことが思われた、しかしナイトランも又楽し、左手に波の打ちよせる音を聞き右に林のざわめきを聞き、ライト一つを頼りに宇土に向う。宇土十時、テント張る気なくなり一五〇円宿に泊る。風呂、食事、蒲団の直線コースをすすみ、極楽にゴールイン。

二十八日　道路工事の音に目をさます。今まで旅行してきたが道路工事をしていない県はなかつた、あと五年もすれば良くなるだろう、八代市に入る手前に大きな橋がある。そこで運転手に呼びとめられた。途中僕等を追い抜いたらしく良く知つていた。その話をしている内にこの先の三太郎峠は自転車では一日かかると云うよかつたら乗つていかないかとの結構な話だが今まで乗つてきたのだから最後まで乗ろうと云う案が出たが結局その厚意に甘えることになつた。やはり三輪車でも自転車より早い。しかしガタガタゆれるのはかなわない、やがて三太郎峠にかかつたが成程すごい峠だ、自転車で行つていたら山の中で寝なければならなかつただろう、湯ノ児温泉の近くで降してもらう。見知らぬ僕達にこれ程のことをしてくれるとは人情未だすたれずと云つた所か。湯ノ児温泉と云つても知らぬ人が多いと思うが最近出来た温泉である。我々はその旅館街の公園にテントを張つて夜を過すことにした久しぶりにゆつくり尺八を吹く温泉の芸者に玄人と間違われまんざらでもないここで民謡が一つ「湯ノ児音頭」

二十九日　今日はどうしても鹿児島入をしなければならない。食料が切れ始めた。その為朝九時に出発する。ところが一台「とめネジ」が一つどこかえ落したらしくその為荷物が下り運転ままならず、自転車屋に行くもサイクリング車は余りあつかつてない為分らない。仕方なく針金の応急手当で走る。二時間程損する阿久根↓川内↓と進むが今日は強風に災いされ自動車の後ジンを拝し、汗とホコリで疲れは二重になる。川内より「ナイトラン」十二時丁度鹿児島より十五キロでホッとする。空腹がその変りにやつてきた。近くに店もなく山の中自動車も通らない。仕方なく道にローソクをたてて残り少い食料を出して食べる即ち乾パン一袋（8枚入）カンズメ一個。これでは一人分にもたりない。何かあつただろうと探す。あるある梅干に生の桜干、空腹は何をも征服する。計梅干一人に一四ケ、桜干一人に一杯、どうやら鹿児島まで保つ位にはこぎつけた、腹の中ではビックリしている事だろう。二時二十分遂に鹿児島市着、入るや否や夜鳴ウドンの店に飛びこむ。ウマかつたあのウドン一人三杯位づつ食べたであろう。食の後には住が心配になる。幸い産経新聞の支社で泊めてもらうことになつていたので朝の六時に御世話になりに行く。もう今日は三十日である。ねむらぬ訳にいかぬから昼までねることにする。

　支社では記事を送つているらしく話が聞える丁度快い子守歌のように、そのままねむつた昼から大阪の校友会から紹介された桑原さんのお宅を訪問する。すでに旅館を予約されていた。旅行先でこのようにして載くのはそれだけの労力の貯蓄である。そのため傍のエネルギーが明日からの旅行に加算される訳で本当に助かつた。とにかくその晩はゆつくりと休養をとることが出来た。昨日の強行軍を今日にして取り戻すべきと考え早くから床に入る。

三十一日　ゆつたりした朝である。整調された身体をもつて朝より民謡調査、自転車修理にかかる。ここでも桑原さんの紹介による南日本新聞文化部と産経新聞の紹介による図書館長にお会いして色々お話をきく、要領を書けば鹿児島には陽性的民謡が主でありそのテンポは早く鹿児島の民謡として「浜節」「ハンヤ節」が今残るものであると云う。又流珠、沖縄、種子島、

屋久島、方面に行けばその独特の民謡があると聞いたがそこまでは手がとどかなかつた。世に鹿児島弁と云うものがあるが特に老人から話をきく時は通訳を必要とする程である。鹿児島市長とお会いした時、鹿児島弁は日本の標準語であるときかされ驚いた。鹿児島の象徴とも云うべき城山からのながめは前方に桜島を望み、錦江湾に沿つて伸びている薩摩半島は南国らしき情諸を充分に表わしていた。

四月一日　市庁の記者クラブで色々と話をし鹿児島湾より桜島の袴腰に向つた。近ずくにつれ桜島の熔岩の偉大さに驚くさすが自然のなせる業である。船の到着と連結して桜島の観光バスがあつた。早速飛び乗つて頂上までゆく昭和熔岩、大正熔岩と奇岩奇石があちこちにみられた、充分に案内をしてもらつて下山下車する。三人降りてから驚いた。誰もバス代を払つていない。車掌もわすれたらしい。三人これ幸いと夕食の足にする。熔岩道路と云つても凸凹道だが、時速十五キロ位で足る。見事な熔岩群である。爆発当時のこのあたりは地獄絵であつたろう、八時頃古里と云う温泉場につく、林フミ子の記念碑のある所であるその前にテントを張る。静かな夜であつた。碑左手に桜島の御島が見える。

二日　温泉旅館で朝風呂に入る、お陰で身体がなまつてしまつた。十二時出発スピードを出して鹿屋に向う。鹿屋は戦前特功隊の基地があつた所だが現在は自衛隊が使つているとか、上空を数機飛んでいた。鹿屋に泊る積りだつたが志布志まで足をのばすことにした。しかしついていなかつたか雨が降り出した。と云つて引き返す訳にもいかず走る。宿をきくつもりで志布志駅へ直行する。色々話をしている内に駅長さん出て来て宿直室に泊りなさい、風呂もあるから」と親切な言葉。例によつて例の如くそれではと雨のふる一夜を駅にて過すことになつた時十時過ぎ。

三日　以後八日までは何の調査も日定の都合で出来なかつたので詳しくは書かないことにする。三日の日は油津にて一泊したが警察の道場で泊めてもらつたが警察で親切だつたのはこと位なものである。途中串間で自転車を降りバスで大隅半島の先端の都井岬へ行く、野生の馬と猿がいると云うので行つたのだが岬は大したこともなく野生馬も数頭みかけただけであつた。時には灯台の附近まで猿が遊びに来るらしい。一番景色がよかつたのは日南海岸であつたが強風のため自転車のハンドルをとられそうになる。途中にあるサボテン国は見事なサボテンが郡生して居り南国らしい。

四日には昼過ぎ青島に着いたが雨のためどうせぬれるなら宮崎までと足を伸ばし翌日青島に引き返すが日南海岸の景色をみてきた僕達には余り驚く程のこともない。五日の日には本当に宿に困つた。旅館に泊るには余裕がなく仕方なくお寺に飛込んだ。最初はことわられたが学生部長の依頼状を出すと「ああ今日新聞にのつていた関大の学生さん」と態度がかわり泊めてくれることになりました。

六日　旅行もあとわずかになるとただ前に走るのみとなる。宮崎日向間は大部分山の中を走るその為自転車の故障が大敵、一度は故障になつたが部品がないため町までバスで買いに行つたこともあつた。日向市内ではポンプ小屋の夜警が泊る宿直室に泊めて頂き、翌日の三国峠越に備えた、七日、今日が今までで最悪の状態であつた。三国峠は西南戦争の激戦地であるが、我々も雨と風と悪路と坂道と全ゆる悪状態が重なつた。最後の難所であつた下り坂にても乗ることかなわず、上り下り約三里押して歩いた程であつた。三国峠を下りた所に三重町と云う小さな町がある。そこの民家に頼んでその晩を過させて頂く。全く今日は疲れた。いやな雨が未だ降つている。桜の花が満開だと云うのにうつとうしい雨である。

八日　別府まであとわずか、昨日の雨も上つたし残りの距離も五十キロである精神的に油断の生ずる頃である。充分に注意して走ることにする。またたく間に大分に着いてしまつた。自転車を借りているサンスター代理店で最後の修理をして頂く。その晩はそこで御世話になる。最後の夜、明晩は船の中であろう、ビールで本旅行の成功を祝してカンパイをする。何だか気が抜けたような気がした。

やはり緊張していたと思われる。

九日　二時三十分、神戸港に向け船が動き始めた。九州ともお別れだ右手に何時間か前に走つた道が大分の方に曲つて手を振つているような気がした。その先先の見知らぬ僕達に親身の如く、旅先の疲れを又困難を助けて頂いた多くの人々に心から御礼申上げここに筆を置くことにします。

海外関係機関より図書寄贈

アメリカ国会図書館（The Library of Congress）より左記機関誌を、

The Library of Congress, Quarterly Journal of Current Acquisitions, Volume 16, August 1959, Number4.

また、イギリス経営協会（British Institute of Management）より左記機関誌を寄贈して来た。

The Manager, The Journal of the British Institute of Management, Vol. 27, No.7/8, July/August 1959.

学内報

定例評議員会

学校法人関西大学寄附行為第十八条第二項による定例評議員会は、十月三十一日（土）午後三時より、天六学舎において開催、左の案件につき審議された。

一、昭和三十四年度学校法人関西大学収支補正予算案に関する件

二、予算外義務負担に関する件

イ、工学部本館建築に関する予算外義務負担の件

ロ、昭和三十五年度在外研究員につき予算外義務負担の件

ハ、関西大学映画製作に関する義務負担の件

三、財産得喪に関する件

イ、土地交換に関する件

ロ、工学部に於ける実験、実習用機械購入に関する件

ハ、千里山馬術部厩舎処分に関する件

四、私立学校振興会より借入金の担保提供に関する件

五、岡野前学長に対する慰労金贈呈に関する件報告

六、工学部管理工学科増設の件報告

その他

出席者（敬称略、五十音順）

阿部甚吉　池田信之助　今井康兼　岩崎卯一　植野郁太　浦野健二郎　江里口春志　越智比古市　大島武夫　大森俊次　織田佐代治　樫本信雄　門上敏夫　神宅賀寿恵　寒川喜一　小寺小市郎　河野稔　佐伯五郎　白川朋吉　関豊馬　竹沢喜代治　寺西武　筧田知義　中石清一　中務平吉　長柄金吾　西尾専太郎　西村治三郎　西本寛一　春原源太郎　東浦栄一　久井忠雄　本多喜慶　堀正人　松原藤由　松村睦鴻　三島律夫　水谷揆一　宮崎平三好万次　村尾静明　村上精三　森寛紹　森川太郎　矢口孝次郎　保井剛一　矢野文雄　山崎敬義　横田健一　吉田鹿之助　吉富二郎　脇野徳三郎　渡辺正人

五学部長改選

五学部長の改選は、九月の五学部教授会においてそれぞれ選出され、十月一日付理事会にて任命された。

法学部長　和田豊二教授
経済学部長　中川庸太郎教授
文学部長　上道直夫教授
商学部長　河村宣介教授
工学部長　田中晋輔教授

なお学部長代理には、桜田誉（法）、松原藤由（経）、三上諦聴（文）、植野郁太（商）太田鶏一（工）、各教授がそれぞれ選ばれた。

新学部長略歴

和田豊二法学部長

昭和三年本学法文学部法律学科卒。本学講師、助教授、教授、関西甲種商業学校長、関大第二商業学校長、法学部長、短大部長

中川庸太郎経済学部長

関大専門部卒、コロンビア大卒、本学講師、助教授、教授、経済学部次長、同部長、大学院兼務、経済学博士

上道直夫文学部長

昭和六年東大文学部独逸文学科卒、本学講師、教授、文学部次長、文学部長

河村宣介商学部長

昭和十四年京大経済学選科卒、本学講師、助教授、教授、生徒主事、経商学部長、学部学生主事、人文科学研究所研究員、商学部次長、短大部長、補導主事

田中晋輔工学部長

大正九年京大理科大学卒、京大講師、助教授、大阪工業大教授、阪大教授（工学部）、工学部長歴任、工学博士

川口教授渡欧

文学部川口勇教授（心理学）は昭和三十四年度在外学術研究員として、十月十二日（月）午後神戸港出帆HESCO「ハンブルグ号」にてドイツへ向つた。

なお、同教授は「認識の発達過程とその教育に対する関連性」をテーマとして、主としてドイツのミュンスタ大学で学び、後ロンドン大学（イギリス）、コロンビア大学（アメリカ）を歴訪する予定。

各種学会盛大に開催

千里山学舎で

この秋、本学千里山学舎を会場にして催される学会は、日本国際政治学会、日本私法学会、日本法社会学会、日本財政学会、国際経済学会関西総会、和歌文学会等で、全国の諸大学から関係学者が多数参集し、学術の秋を飾ることになるであろう（なお、各学会の模様は別項参照）

教職特別講習

公立学校教員志望者に対し左記により特別講習並びに模擬試験を実施する。

記

一、日時、科目、担当講師及び教室

月日	科目	講師
十一月五日	教育史、教科教育法	筧田助教授
十一月六日	教育心理学、テスト	辻岡助教授
十一月七日	教育社会並びに生活指導	本庄助教授
十一月九日	教職教養試験（一般並びに原理（含行財政））	鈴木教授
十一月十四日	模擬テスト（教職専門及び一般教養）	右講師全員

二、受講対象　公立学校教員志望者約二〇〇名

三、講習料　無料

人事異動

昭和三十四年九月三十日付
任期満了につき法学部長を解く　教授　和田豊二
昭和三十四年九月三十日付
任期満了につき文学部長を解く　教授　上道直夫
昭和三十四年九月三十日付
任期満了につき経済学部長を解く　教授　中川庸太郎
昭和三十四年九月三十日付
任期満了につき商学部長を解く　教授　山崎紀男
昭和三十四年九月三十日付
任期満了につき工学部長を解く　教授　田中晋輔
昭和三十四年九月三十日付
任期満了につき法学部長代理を解く　教授　桜田誉
昭和三十四年九月三十日付
任期満了につき文学部長代理を解く　教授　藤本是
昭和三十四年九月三十日付
任期満了につき経済学部長代理を解く　教授　松原藤由
昭和三十四年九月三十日付
任期満了につき商学部長代理を解く　教授　川元英二
昭和三十四年九月三十日付
任期満了につき工学部長代理を解く　教授　太田鶏一
昭和三十四年十月一日付
法学部長を命ずる　教授　和田豊二
昭和三十四年十月一日付
文学部長を命ずる　教授　上道直夫
昭和三十四年十月一日付
経済学部長を命ずる　教授　中川庸太郎
昭和三十四年十月一日付
商学部長を命ずる　教授　河村宣介
昭和三十四年十月一日付
工学部長を命ずる　教授　田中晋輔
昭和三十四年十月一日付
法学部長代理を命ずる　教授　桜田誉
昭和三十四年十月一日付
文学部長代理を命ずる　教授　三上諦聴
昭和三十四年十月一日付
経済学部長代理を命ずる　教授　松原藤由
昭和三十四年十月一日付
商学部長代理を命ずる　教授　植野郁太
昭和三十四年十月一日付
工学部長代理を命ずる　教授　太田鶏一
昭和三十四年十月一日付
関西大学学内協議会協議員を委嘱する
但し任期は商学部長の任期中とする　教授　河村宣介
昭和三十四年十月一日付
関西大学教授に任ずる　専任講師　山口吉兵衛
昭和三十四年十月一日付
関西大学副手に任ずる　工学部勤務を命ずる　中村康彦
昭和三十四年十月一日付
関西大学副手に任ずる　工学部勤務を命ずる　坂本勇
昭和三十四年十月一日付
関西大学第一高等学校専任講師に任ずる　第一高等学校講師　法兼礼次郎
関西大学第一中学校兼務を命ずる
昭和三十四年十月一日付
関西大学第一中学校専任講師に任ずる
関西大学第一高等学校兼務を命ずる　第一中学校講師　船越修
昭和三十四年十月一日付
関西大学経済・政治研究所研究員を依嘱する　浪江源治
昭和三十四年十月一日付
関西大学経済・政治研究所研究員を依嘱する　朝倉利景
昭和三十四年十月五日付
関西大学教授に任ずる　工学部勤務を命ずる　菅原菅雄
昭和三十四年九月三十日付
補導主事を解く　教授　河村宜介
昭和三十四年九月三十日付
補導主事を解く　助教授　筧田知義
昭和三十四年九月三十日付
就職主事を解く　教授　河村宜介
昭和三十四年十月一日付
補導主事を解く　教授　川元英二
昭和三十四年十月一日付
就職主事を命ずる　教授　藤本是
昭和三十四年十月一日付
補導主事を命ずる　助教授　高堂俊弥
昭和三十四年十月一日付
関西大学助教授に任ずる　専任講師　下間頼一
昭和三十四年十月一日
関西大学助教授に任ずる　専任講師　太田義一
昭和三十四年十月一日
関西大学専任講師に任ずる　助手　瀬尾芙巳子

学会出張

◇商学部来住哲二専任講師は十月一日から六日まで青山学院大学における日本商業英語学会に出席。
◇商学部寺尾晃洋助教授は十月二日から四日まで東洋経済新報における公益事業学会に出席。
◇商学部亀井利明専任講師は十月五日から十二日まで小樽商科大学における日本保険学会に出席。
◇商学部柏尾昌哉助教授は十月八日から十二日まで島根大学における農業経済学会に出席。
◇文学部宇田米夫専任講師は十月八日から十三日まで福島大学における日本地理学会に出席。
◇文学部田中英三助教授は十月九日から十二日まで広島大学における日本論理学会及び十五日から十七日まで関西学院大学における日本宗教学会に出席。
◇工学部薬師寺正雄助手は十月十日から十五日まで名古屋大学における日本鋳物協会に出席。
◇工学部勝田勝太郎助教授は十月十二日から十八日まで東京都における日本機械学会に出席。
◇文学部横山哲夫助手は十月十三日から十七日まで慶応大学における西洋古典学会及び法政大学における日世啓学会に出席。
◇経済学部浜田文雅、山本繁禅両助手は十月十五日から十七日まで慶応大学における理論経済学会に出席。
◇文学部三上諦聴教授は十月二十三日から二十六日まで慶応大学における現代中国学会に出席。
◇文学部大西昭男助教授は十月二十三日から二十六日まで早稲田大学におけるアメリカ文学秋季大会に出席。

学会便り

日本私法学会
千里山第一学舎で

日本私法学会第二十三回大会は、十月十三(火)、十四(水)の両日に亘り、本学千里山第一学舎教室及び講堂で、全国から関係学者約三五〇名参集して、盛大に開催された。

研究報告の次第は左の通りである。

第一日（十三日）

研究報告

第一部会

「夫婦間の義務のreciprosity」　九州大学　助教授　有池　亨

「ドイツ普通法学の錯誤論」　東京大学　助教授　村上　淳一

「明治民法施行前の婚姻法と養子法」　中央大学　教　授　沼　正也

第二部会

「委任状勧誘と議決権代理行使」　神奈川大学　助教授　菱田　政宏

「株式配当と無償交付」　青山大学　講　師　久保　欣哉

「フランスに於ける多数決　濫用理論の一面」　京都大学　助教授　竜田　節

民商合同シンポジウム

「原子力災害補償」

司会　東京大学教授　鈴木　竹雄

東京大学　助教授　星野　英一

東京大学　助教授　竹内　昭夫

第二日（十四日）

民商合同シンポジウム

「譲渡担保」司会　東京大学名誉教授　我妻　栄

実態調査（東京地区　東京大学教授　加藤　一郎）（関西地区　神戸大学助教授　河本　一郎）（大阪大学助手　浜上　則雄）

比較法

（大阪市立大学助教授　植林　弘）（東京大学助教授　三ケ月　章）

祖税と譲渡担保

総会および懇親会

なお本学からは池垣、伊沢、木村、福島、和田各教授　岩本、高島、本浪、槇各助教授らが参加。研究報告第二部会では本学伊沢教授が司会、理事会には矢口学長、和田法学部長がそれぞれ挨拶、懇親会はまれにみる盛祝、木村大学院部長が学長を代理として挨拶、会期中好天に恵まれた多大の成果をおさめて終了した。

和歌文学会
千里山学舎で

和歌文学会第五回大会は、十月十七、十八両日に亘り、千里山学舎その他で開催され、全国から関係学者約二五〇名が参集した。

なを大会の行事スケジュールは左の通りである。

第一日　十月十七日（土）

一、歌枕めぐり（午前九時～午後一時）

二、公開講演会（午後二時・大阪毎日新聞社講堂）

司会　関西大学教授　飯田　正一

1　挨　拶　大阪女子大学学長　平林　治徳

2　古典和歌の一問題　関西大学教授　風巻景次郎

3　万葉集の難解歌　国学院大学教授　文学博士　高崎　正秀

4　将来の放送文化と和歌的律格との関係　東洋大学教授　文学博士　斎藤　清衛

（後援　毎日新聞社）

第二日　十月十八日（日）

一、研究発表

1　夜隠　東京学芸大学　中西　進

2　万葉における古歌の誦詠　成城大学　内田　暁郎

3　物名歌をめぐって―その担ひ手たち―　大阪府立豊中高校　乗岡　憲正

4　後撰集のいわゆる歌物語契機の再検討　東北大学　渋谷　孝

5　新勅撰集の歌風をめぐって　早稲田大学　藤平　春男

6　西行上人の歌―細みについて　大阪府立島上高校　山崎　雪子

7　明治初期における国学者の和歌　昭和女子大学　甲斐知恵子

8　近代短歌における行分けについて　昭和女子大学　高橋　良雄

9　四条官下野と周辺　日本大学　橋本不美男

10　万葉代匠記初稿本のこども　関西大学　吉永　登

二、討論会

題目「和歌文学に於ける伝統と創造」

司会　愛知女子大学　山崎　敏夫

請師　昭和女子大学　小野十三郎

関西学院大学　木俣　修

東北大学　峯岸　義秋

日本財政学会
千里山第三学舎で

昭和三十四年度（第十六回）日本財政学会大会は、十月三十一日(土)、十一月一日(日)の両日に亘り、本学千里山第三学舎で開かれ、全国から関係学者約二五〇名参集した。

共通論題は「財政学の方法と体系」で、研究報告の次第は左の通りである。

第一日（十月三十一日）

国際財政学会の報告　京都大学　島　恭彦

○研究報告（共通論題）　座長　東京大学　武田　隆夫

一、財政学の方法と体系　広島大学　山下覚太郎

二、財政における政治と経済　東京大学　鈴木　武雄

三、財政学の方法と体系　早稲田大学時子山常三郎

○研究報告（自由論題）

一、祖税転嫁論の問題状況　一橋大学　木村　元一

第二日（十一月一日）

○研究報告（自由論題）

一、売上高税の一考察　早稲田大学　松下周太郎

二、ビルト・イン・スタビライザーとしての社会保障　桃山学院大学　菅井　勇蔵

三、経済成長と財政政策理論　熊本大学　米原七之助

○研究報告（自由論題）

一、リカアドオ祖税論の解明　神戸大学　中村　一雄

○研究報告（地方財政）　座長　大阪府立大学　藤谷　謙二

一、現代的地方自治と地方調整制度の一視点　大阪市立大学　西川　清治

二、現行国庫補助金制度の問題点　鹿児島大学　岩元　和秋

三、戦後における日本の地方財政調整交付金の役割　立教大学　藤田　武夫

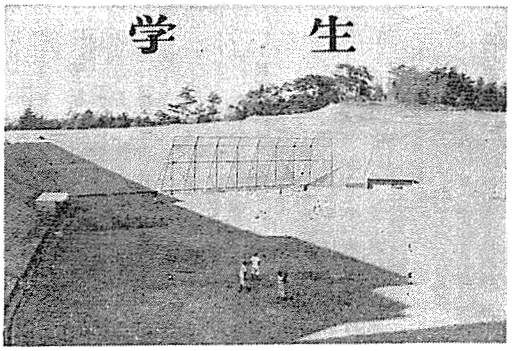
法学者国際委員会より
図書寄贈

法学者国際委員会（International Commission of Jurists, Geneva）より、この程左記図書を寄贈して来た。

Journal of the International Commission of Jurists, Vol. 11, No. 1, Spring-Summer 1959.

Bulletin of the International Commission of Jurists, No.9, 1959.

Newsletter of the International Commission of Jurists, No.7, 1959.



大学祭

恒例の大学祭は、大正十五年（昭和元年）に初めて第一回を催してから本年で回を重ねること第三十回に当るので、その記念と銘打つて意義深く、しかも盛大に、十月二十四日（土）、二十五日（日）の両日千里山学園で開催された。なお、「大学祭の意義は単なる学園のお祭りではなく、日頃の試練を耐え抜いた学術、文化、体育などの研究成果を発表する場所であることを十二分に認識して、過去の大学祭のマンネリから一歩でも前進さすべく努力しました」（千葉実行委員長）といわれる程その開幕が期待された。

両日共絶好の秋日和、ようやく秋色みなぎる千里山丘陵に、大学祭第一日目（二十四日）が入場式、開会宣言で始められ一高一中の合同体操、各種リレーやラグビー公開練習、拳法野試合、または応援団余興に第一会場は賑い、第二会場では弓道、空手、剣道、相撲、フェンシング、庭球、重量拳等が日頃練習の跡をみせ、弁論、邦楽、吹奏楽、軽音楽、交響楽、演劇（学園座）等は舞台関係プログラムとして学生の趣味の広さを公開した。

第二日目（二十五日）も前日に劣らぬ快晴に恵まれ、予想外の観衆にさしもの千里山学園も人の波。第一会場たる第一グラウンドでは昨日同様運動各部のページェントが催され、午前十一時頃には祝賀飛行に一つアクセントを入れ、午後の祝砲を機に大学祭気分はますますもりあがり応援団乱舞、仮装行列、関大阿波踊り、土人踊り、最後にファイアストームに、クライマックスを奏でながら、暮れ行く晩秋の帳にカレッヂマンでなくては味えぬ若人の感傷を漂せつつ、両日に亘つた大学祭を終了した。

リーダーズキャンプ

第一回リーダーズキャンプは八月十八日より学生部、学友会共催のもとに三泊四日の日程で、風光明眉な和歌山市雑賀崎で開催された。

第一日　アメリカ文化センター提供の映画「友性のかゞり火」、「討議の進め方」映写の後、寛田助教授から討議法に関する講演を聞いたが、これはその後の学生の討議を非常にスムーズにさせることに役立つた。

第二日　「意識と生活における大学生の特権の問題」について部屋別討議、まとめ、及び報告会、池垣、藤本各教授、松本助教授による「海外の学生生活」に関して対談があり、夕食後、池垣教授の解説を聞き乍ら欧州留学中の記録映画を鑑賞。午後八時過ぎよりリクリエーションとして部屋別対抗抗演芸大会があり、珍芸が続出一同大いに笑い肩のこりをほぐした。

第三日　藤本教授の「学生とヒューマニズム」についての講演は時にユーモアーを混え学生にもつとも深い感銘を与えたようであつた。班別討議は「グループ活動における人間関係」につき相当活発な討議、それの纏めが行われ、リクレーションとして島めぐり、夕方から学長、各学部長、専務理事、常務監事を囲んでの夕食会、午後八時三十分頃より雑賀崎突端に、青春の火を燃やすキャンプファイヤーが赤々と燃えつゞけた。

第四日　班別討議の報告、リーダーズキャンプに対する感想会が行われ、参加者の此の催しに対する希望、反省が活発になされ、その後評価、閉会式を行い今回の行事全日程を終わり、昼食後、南海の太陽が潮風の中に輝いているキャンプ地雑賀崎に別れをつげ帰路についた。

学生の感想

参加前は余り期待していなかつたが、四日間のキャンプを通じて得る処が多くお互の人間関係において理解を深めた。特に藤本教授が我々の実践の方針を明示され、深い感銘を受けた。今後この成果を此処だけに止ゞめず学内に持つて帰つて実践して行きたい。（法四＝千葉）

余り期待していなかつたが、それでも何か期待して参加したが良かつたと思つている。食事の際の礼儀。就寝時間が少し遅れたりしたが然かしクラブ相互の理解に役立つた。（法四＝岩崎）

非常に良かつたと思つている。テーマについて本当に研究して来ること、団体生活の規則を守ること、キャンプの際何うしても団体を中心にして動くが、お互個人の交流をもつと計りたい。（法四　神保）

その他

(イ)、参加者をもつと多くすること。低学年を中心にしてほしい。

(ロ)、学長、学部長との対談、座談会の機会がほしい。

(ハ)、時間の配分。自由時間をもう少し多くすること、などについて考えてほしい。

校友バッジ

校友

校友会の動き　九月

一　日　組織部会
六　日　城東支部発会式
七　日　財務部会
十二日　柏原支部発会式
十九日　部長会
十九日　尚志会祝賀会
二十二日　広報部会
二十五日　事業組織合同部会
二十六日　茨木支部発会式
二十八日　総務部会
二十八日　神戸支部祝賀会
三十日　広報部座談会

たるため大学から岩崎、木村、中井各教授が出席、校友会からもこの打上げ発会式にあたり、大月会長はじめ長柄副会長門上組織部長、金本同副部長が出席。藤村保成氏の司会で始められ、ユニフォーム姿の本学ブラスバンドによる学歌などの演奏が行われ、さかんな柏手をあびた。

議事にはいつて発起人江原氏から設立経過の報告があり、会則案を検討承認したのち、役員を発起人で推せん、承認を得て決定した。

城東支部発会式

大阪市城東区に在住する校友の間で支部を作ろうとする動きは、本部の仂らきかけもあつて準備が進められ、九月六日午後四時半から発会式を城東区役所講堂で開催。

発会式は大阪市内二十二区中最後にあたるため大学から岩崎、木村、中井各教授が出席、校友会からもこの打上げ発会式にあたり、大月会長はじめ長柄副会長門上組織部長、金本同副部長が出席。藤村保成氏の司会で始められ、ユニフォーム姿の本学ブラスバンドによる学歌などの演奏が行われ、さかんな柏手をあびた。

議事にはいつて発起人江原氏から設立経過の報告があり、会則案を検討承認したのち、役員を発起人で推せん、承認を得て決定した。

恩師から祝辞があり、支部長に選ばれた江原氏が抱負をのべ、校友会側各氏のあいさつもあつて午後九時閉会した。

当日決定役員
支部長　江原　範雄

柏原支部発会式

柏原市内に在住する校友の間でも支部結成の動きがまとまり、九月十二日午後六時から大阪市阿倍野の「おばさん」で発会式が開かれた。

この日は約二十名が出席、本部からも大月会長、門上組織部長、金本同副部長が出席。会は発起人の一人石幸末太郎氏の設立経過報告があり、奥野氏を議長に推せんして会則案を審議決定したあと、役員選出に移り、選考委員で協議の末、支部長に奥野甚蔵氏ほか役員を選出した。

大月会長、門上組織部長からもあいさつがあつて、懇親ののち閉会。

当日決定役員
支部長　奥野　甚蔵
副支部長　柏元孝治、石幸末太郎
なお、支部事務所は柏原市本郷八九四・柏元孝治氏方におかれる。

尚志会祝賀会

大阪市中学校に在勤の校友で組織されている尚志会では、九月十九日午後三時半から南区「喜楽別館」で村上精三、足立信治、明珍昇の各氏の祝賀会を開いた。

これは市教委庶務部長に栄転の村上氏緑中学校長に栄転の足立氏、大阪市民の歌に入選の明珍氏の祝賀のため開かれたもので、会員はじめ市関係者らも出席、各氏を祝福し、歓談ののち午後五時半閉会した。

茨木支部発会式

茨木市内在住校友で支部を作る運動も他地区と同じく本部の仂きかけにより準備も整のい、九月二十六日午後五時から茨木市労仂会館で発会式が行われた。

この日は折あしく台風十五号の接近で暴風雨の中を委任をあわせて十六名が出席して始められ、数回にわたる発起人会で検討した会則案を再検討のすえ決定と見なすことになり、出席者が少かつたが正式に発会することにきめた。この発会式には文学部鈴木教授の講演も聞く予定であつたが台風のためやむを得ずとりやめた。

当日決定役員
支部長　野口久次郎
副支部長　森景京一、上田治雄
なお、支部事務所は茨木市下穂積五六・支部長宅におかれる。

神戸支部祝賀会

神戸支部では今春の選挙で神戸市議選挙に校友中から伊田、森田両氏がめでたく当選したので、当選を祝福するため九月二十八日午後六時から市内の純ロシヤ料理店「ワシリー」で祝賀会を開いた。

この日出席者は七十名に達し盛況で、伊田、森田両氏も校友一同の祝賀に感激し、市政についての活躍をちかつた。

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十四年十月三十日発行（毎月一回三十日発行）

關西大學學報 第三三二号 十月号

編集兼発行人 久井忠雄 発行所 關西大學出版部 大阪市大淀区長柄中通二丁目 電話堀川(35)二〇七二番 振替大阪二六七七二番

印刷所 株式会社ナニワ印刷所 電話(35)七二七一

昭和35年度 関西大学入学試験概要

学部

		(一部)	(二部)
法学部	{法律学科 / 政治学科}	400名	300名
経済学部		400名	300名
文学部	{英文学科 / 国文学科 / 哲学科 / 仏文学科 / 独文学科 / 史学科 / 新聞学科 / 東洋文学科}	300名	150名
商学部		400名	150名
工学部	{機械工学科 / 電気工学科 / 化学工学科 / 金属工学科}	400名	
	管理工学科（申請中）		

（出願期間及び試験日）

	出願期間	試験日
地方試験（高松，福岡，広島，金沢，名古屋各地）		
（一部全学部）…	昭和35年1月19日～2月15日	2月21日
法学部…	〃 2月18日	2月21日
商学部…	〃 2月19日	2月22日
文学部…	〃 2月20日	2月23日
経済学部…	〃 2月20日	2月24日
工学部…	〃 2月22日	2月25日

（試験科目）

法・経・文・商学部…国語、英語、社会、数学（簿記）（二科目選択）

工学部…理科（物理、化学の中の一科目）、英語、数学

大学院

博士課程	法学研究科 {公法学専攻 / 私法学専攻}	10名
	文学研究科 {国文学専攻 / 哲学専攻}	4名
	経済学研究科 {金融経済・経済史専攻}	3名
修士課程	法学研究科 {公法学専攻 / 私法学専攻}	60名
	文学研究科 {英文学専攻 / 国文学専攻 / 哲学専攻 / 日本史学専攻}	60名
	経済学研究科 {経済学専攻}	50名

（出願期間）

昭和35年3月1日～3月26日

（試験日）

昭和35年3月30日、31日（2日間）

（試験科目）

博士課程…主論文、副論文、外国語

修士課程…論文、外国語

なお、詳細については「昭和35年度關西大學學生募集要項」を参照して下さい。

関西大学経済学会編

関西大学 **経済論集** 第第三九号巻

昭和三十四年九月刊 A5判 一二〇頁

内容

現段階における経済政策の特質 ―特に産業構造と経済政策― …… 松原藤由
ミルの利潤起源論分析 …… 杉原四郎
貧困学と三派の人口論 ―続日本人口論史― …… 市原亮平
江戸時代漁業に関する若干の史料 ―阿波国板野郡里浦を主として― …… 津川正幸
書評
J・M・ギルコン「利潤率の低下」 …… 三谷友吉

関西大学商学会編

関西大学 **商学論集** 第第四三巻号

昭和三十四年八月刊 A5判 九九頁

内容

資本制社会における社会政策機能の二重性 (一) …… 河野稔
科学的管理とAFL …… 高堂俊弥
シェアー商業経営学における商業学の科学化について (一) …… 大橋昭一
アメリカ優先株の登達 (一) …… 松谷勉
レーマン「財務計画論」についての一考察 (一) …… 山上達人
書評
マーク・パールマン著「アメリカにおける労仂組合理論」 …… 小林英夫